雪に消える

STUDIO BANA

雪に消える

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=17268492

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, ロモそく

ネイル村でヒュンケルが迎えた初めての冬。そのある日の１コマ。
「樫の木は両手を広げ」novel/16937048のあと、「賢者のお告げ」novel/16772511 2ページ目の前。

ヒュンケルがネイル村に来る前のことが話題に出てきます。
私の中では、原作最終回以降、ヒュンケルがネイル村に来るまでの経緯は、年表のように決まっています。ヒュンケルは、ここに来るまでの間、何度か居と立場を変えており、そのうちの１つが「アーモンドの花」novel/16935786で出てきた、カール王国近衛師団副師団長としての地位であり、また、この話で出てくる過去のことでもあります。
そのあたりの経緯は、順番に書いていくつもりです。何があったのかは、まだここでは書けませんが、彼がヒドイ目に遭ったわけではないことだけは、明記しておきます。
表紙は、BANA様user/44876525にお借りしました。素敵な冬の夜の風景です。

なお、本作は、お題「『お前の声が聞けない日々なんて、想像できない』の台詞を使ってヒュンマを書く」、への回答でもあります。

2022.3.26　ダイの大冒険オンリーイベント「ロモそく」合わせ

Table of Contents

雪に消える

　陽が落ちると、窓の外からは、浸みこむような冷気がリビングに入り込んできた。今夜はこの冬で一番の寒さだ。
　マァムは、肩にショールをかけたまま暖炉に近づくと、薪をくべた。暖炉の火は、新たな燃料を得て、一瞬、大きく爆ぜた。そして、薪をその身の中に取り込み、炎は、穏やかな温かさを放ち続けた。
　マァムは、ふと、窓の外に目をやった。
　細かい桟の間にはめ込まれたガラスは分厚く、その窓を通した外の景色は歪んで見えた。
　ましてや、明かりの乏しい村の夜では、外の様子は窺い知れない。
　だが、その不鮮明な景色の中にも、マァムは、普段とは異なる印象を覚え、そっと窓を開けた。
　さっと、身を切るような冬の冷気が窓から入り込んできた。
　リビングで食後のコーヒーを口に運んでいたヒュンケルは、急に室内に入り込んできた冷気に気付き、マァムの背に目をやった。
　マァムの背中越しに、窓の外の景色が見える。
　ネイル村の冬の夜、空に明かりはなく、遠くの家々から漏れるぽつぽつとした明かりだけが、暗闇の中にぼんやりと浮かび上がっていた。
　ふと、その景色の中に、ヒュンケルも違和感を覚えた。
　漆黒の夜の帳に、はらはらと舞い落ちるものがある。
　その正体に気付き、ヒュンケルはつぶやいた。
「・・・雪か。どうり寒いわけだな。」
「ええ。降ってきたわね。
　積もるかしら。」
「どれ。」
　ヒュンケルは立ち上がり、窓の前に立ったマァムに近づくと、外の様子を見た。
　粒の大きな牡丹雪が、墨のような夜空から次々と落ちてくる。音

もなく降り注ぐその純白の塊が、天から迫るように押し寄せてくる。
　その雪は、彼を通り過ぎて地面に落ちていった。次々と大地に吸い込まれてゆきながらも、しっかりと根を張るように思えた。
　ヒュンケルは、空を仰いでその様を見ながら、マァムにつぶやいた。
「積もるかもしれないな。」
「珍しいわね。」
「そうなのか？」
「うん。ロモスではね。雪が降ること自体珍しくて、滅多に積もらないのよ。だから、たまに降ると大変なの。」
　マァムは困ったように肩をすくめた。
　ヒュンケルにとって、ネイル村で迎える初めての冬は、確かに、彼がそれまで暮らしたことのあったどの地方よりも温暖だった。
　マァムのさまに、ヒュンケルも苦笑した。
「明日の朝は、雪かきに苦労するかもな。」
「そうね。」
　ヒュンケルは、もう一度、窓の外に目をやった。
　宵闇の中に、純白の大きな雪の粒が降り注ぐ。
　その向こうに、いつも通りの村の景色があった。
　近くの家で、木の扉が開く音がした。
　村の誰かの声が聞こえた。
「降ってきたぞー。」
　あちこちから扉が開き、そしてまた閉じる音がした。ばたばたとした足音に、木の落ちる乾いた音。
　雪の夜に備えて、軒下の薪を多めに家の中に入れようとしているのだろう。
　その音だけでも、村の人々の行動が感じられた。
　耳に届くのは、人の息吹だけではなかった。
　遠くから、聞こえる馬のいななきや豚の声、鶏の羽音。
　夜の森から響く、風を切る音。
　あれは猛禽の飛ぶさまか、あるいはキメラやドラキーの飛び立った気配なのだろうか。

じっと、耳をそばだてながら、ヒュンケルは、夜の村を見つめていた。
　その目はどこか寂しげで、手負いの獣のようにも見えた。
　おそらく、彼の脳裏にあるのは、この目の前の風景ではないのだろう。
　マァムは、首を少し傾げて、すぐ後ろに立つ彼の横顔を仰ぎ見た。そして、その心に浮かぶ風景を思った。
　マァムは、穏やかな声でヒュンケルに呼びかけた。
「ヒュンケル。冷えちゃうわ。窓、閉めましょう。」
　ヒュンケルは、視線を下げて、マァムを見やると、ふっと、消え入りそうな笑みを浮かべた。
「ああ・・・そうだな。」
　マァムは、窓を閉めると、長椅子に置いたブランケットを手に取った。そして、椅子に座り直したヒュンケルの肩に、ふわりとそれをかけた。
「寒かったでしょう？」
「ああ。ありがとう。」
　そうして、ヒュンケルは、テーブルの上で両手を組んだまま、目を閉じ、耳をそばだてた。
　彼はしばらくの間そうしていると、ぽつりとつぶやいた。
「ここでは、雪の日にも、音が聞こえるのだな・・・。」
　ひどく感傷的なその声色に、マァムは、彼の心情を察した。彼女は、慮るように控えめに言葉をかけた。
「・・・思い出す？リンガイアのこと。」
「・・・ああ。」
　ヒュンケルは、うなずいた。
　ヒュンケルがこのネイル村に来る少し前のこと。彼は、しばらくの間、リンガイアの山の中で、一人で暮らしていた時期があった。その山の中の炭焼き小屋は、マァムも訪れたことがあるので、よく知っていた。
　彼は、それまで所属していたカールを離れ、騎士団の徽章も返還していた。
　リンガイアの雪山。

人里離れた山の中にぽつんと立つ一軒家。
それは、まるで、人の世から離れて暮らそうとしていた彼自身のようでもあった。
ヒュンケルは、ぽつり、ぽつりと、言葉を紡いだ。
「俺がいたリンガイアの炭焼き小屋では、雪が降ると、里への道は閉ざされた。一切の往来が止まるんだ。
獣も、モンスターも、雪の降る夜は、息をひそめている。
人の声も、獣の声も、何も聞こえなかった。聞こえるのは自分の呼吸くらいで。
何の物音もしなくなって、この世から音がすべて消えたようだったな・・・。
あれはまるで、夢の中の風景を外から見ているような感覚だった。」
マァムは、ヒュンケルのすぐ隣に椅子を置くと、そこに座った。そして、黙って、彼の言葉に耳を傾けていた。
「雪は、音を吸い込むような気がする。
だが・・・。
ここでは、人の声も、物音も、家畜の声も聞こえる。
それが、不思議に思えた。」
マァムは、黙って、テーブルの上の彼の手に、自分の手を重ねた。雪の夜に、互いの温かさが染みわたった。
マァムは、ぽつりと、語り掛けた。
「・・・ヒュンケル、本当によかったの？」
「何がだ？」
「この村に来てくれて。」
「どうしたんだ、急に。」
「・・・だって、私が強引に連れてきちゃったような気がして。」
マァムのためらいがちな言い方にヒュンケルは驚き、そして苦笑した。
確かに、ネイル村に来ないかと持ち掛けたのはマァムの方だった。
だが、マァムが彼にしてくれたことで、余計だと思ったことなど一つもなかった。

ヒュンケルは自分の手を抜くと、今度は、マァムの手の上から自分の手を重ね、握り直した。その手から、力強い温かさが伝わってきた。
「嫌だと思っていたら、村のために動こうなんて思わないさ。
　いまは、俺にとっても、この村は故郷だ。
　お前が俺に、新しい住処を与えてくれたんだ。」
　ヒュンケルは、穏やかな目でマァムを見つめた。
「マァム、お前はいつも、俺を救ってくれている。
　地底魔城のときも。
　鬼岩城との戦いのときも。
　リンガイアでも。
　俺が、道を踏み外したとき、暗い道に行こうとしたとき、人の世に背を向けて生きていこうとしたとき。
　いつだって、俺に手を差し伸べてくれたのはお前だった。
　お前と出会わなければ、今の俺はなかった。」
　ヒュンケルは、ふと、過去の思い出を口にした。
「マァム、父さんの貝殻を見つけてくれたのもお前だったな。
　あのときの父さんの言葉は、いまもよく覚えている。」
　マァムは黙ってうなずいた。
　ヒュンケルを慈しんで育てた、骨の父の言葉は、マァムの耳の中にも残っていた。
　地底魔城の隠し部屋で、初めて、魂の貝殻に込められた言葉を聞いた時、マァムは涙があふれた。
　なんて深い慈しみだろう、と思い、マァムはバルトスの子を想う心情に心打たれた。
　そして、あの城の牢で見たヒュンケルの悲しみに満ちた、傷付いた眼差しと、バルトスが彼に向けた掛値ない愛情の深さを重ね合わせ、その想いのすれ違いに心を痛めた。
　だが、あのバルトスの遺言が、あれから数年経った今も彼の中に残されているのであれば、あの宝物が見つけられてよかったのだと、マァムは心から思えた。
　ヒュンケルは、呟いた。
「人間らしく生きてくれ。」

その音色が、二人の中に、バルトスの声でよみがえった。
二人だけしか知らない声色だった。
「あの言葉をかなえてくれたのは、お前だった。」
ヒュンケルは言葉をつづけた。
「あのまま魔王軍の戦士として散っていたかもしれない俺に、そうでなかったとしても、世間から隔絶して生きるしかないと思っていた俺に、手を差し伸べてくれたのは、お前だった。
お前が俺を、人の世に戻してくれたんだ。」
ヒュンケルの言葉が、丁寧にひとつずつ、並べられてゆく。そこにある、マァムに対する深い感謝と愛情を、マァムも感じ取っていた。
「音も何もしなかったあの雪山とは、ここは違う。
人の声も音も、家畜の声も物音もする。
人が生きている気配がする。
何よりも、お前の声がある。
お前の声が聞こえない日々など、俺にはもう考えられない。」
そうして、ヒュンケルは、マァムの手を握る己の手に力を込めた。
「お前と生きていきたいと思った。
だから俺は今ここにいる。
お前に感謝こそすれ、後悔するようなことは何もない。」
はっきりと語られる彼の言葉に、マァムはふっと笑みを浮かべた。暖炉の火が広がるように、胸が温かくなる。
「・・・ありがとう。」
ヒュンケルはかぶりを振った。
「礼を言うのは俺の方だ。
もどかしいな。
どうしたら、俺がお前をどれだけ愛しているのかを伝えられるのだろうか、といつも思う。」
急に語られた愛の言葉に、マァムはさっと頬を赤らめた。彼から視線を外し、うつむいて呟いた。
「・・・知ってるわ。
毎日言ってくれるもの。」

ヒュンケルは、即座に反論をした。
「いや、足りないな。
　お前が思っている以上に、俺はお前を愛しているんだ。」
　そう言うと、ヒュンケルは、マァムを抱き寄せた。彼の腕の中に閉じ込められる。
　ヒュンケルは、左腕を彼女の肩に回して抱き寄せ、そして右手を彼女の頭に回し、自分の胸に押し当てた。そして、彼女の視界を遮ったまま、言葉を落とした。
「言葉だけでは足りない。
　伝えさせてくれ。
　お前を愛している。」
　その言葉の意味を感じ取り、マァムはどきりと身を震わせた。
　怖いわけではない。
　ただその予感に戸惑う。
　彼の体がすでに熱を帯びていることを、マァムは感じ取っていた。
　ヒュンケルは、マァムに問いかけた。
「・・・嫌か？」
　マァムは黙って首を横に振った。
　すると、ヒュンケルは安心したように、息を吐いた。
「そうか・・・。」
　そのまま彼は、彼女を抱きかかえて立ち上がった。マァムがかけてくれたブランケットが、ふわりと床に落ちた。
「！ヒュンケルっ・・・！！」
　マァムはバランスを崩し、反射的に彼の首に抱きついた。
　彼の胸に顔をうずめながらマァムは懇願した。
「・・・恥ずかしいわ。下ろして。」
「お前だって、俺をこうやって抱きかかえたことがあっただろう？」
「あれは非常事態！」
「なら、今も、非常事態だ。俺が、な。」
「・・・もう。」
　不満げにそう言いながらも、マァムは彼の首に回した腕に力を込

めた。そして、ちらりと、窓の外に目をやった。
　雪はまだ降り続いている。
　マァムは思った。
　彼の言葉のとおり、雪が音を吸い込むのなら、このまま今夜はこの家を、この村を雪の中に閉ざしてしまえばいいのに。
　朝になれば、雪をかいて日常に戻ろう。
　でもいまは、二人だけでいたい。
　そう思った。